

関係項の同一性はいかにして保たれるのか

ジェイムズ哲学における「ミラー-ボードの反論」の位置づけ

大 匠 諒 (中央大学兼任講師)

本発表では、W・ジェイムズ(1842-1910)の晩年に書かれ、彼が多元的宇宙論を本格的に展開していく起点となった草稿「ミラー-ボードの反論(The Miller-Bode Objections)」の成立過程とその議論の内実を検討する。本発表の議論を通して、ジェイムズ後期形而上学の重要な側面が明らかになる。

ジェイムズは1904年から翌年にかけて、のちに『根本的経験論』としてまとめられることになる諸論考を発表し、自身の哲学体系を明確にしようと努力していた。そのころ、ジェイムズの学生であったD・S・ミラー(1868-1963)とB・H・ボード(1873-1953)から、ジェイムズの経験概念に対する批判が寄せられた。それによれば、ひとつの経験がみずからの同一性を保ちながら複数の関係に入ることは不可能である。経験がどのようなものであるかは、それがどのように経験されるかに依存しているのだから、ひとつの純粋経験が複数の系列と関係し、別様に振る舞うとき、その経験はもはや同一の経験ではない、というものである。

この批判はジェイムズ哲学にとって重要である。なぜなら、彼の哲学の中心概念である純粋経験の存否が、この批判を退けることにかかっているからである。ジェイムズは、心身の実体的二元論に代えて、物心の区別以前の純粋経験を自身の存在論の基礎に据えた。そして、物質的・精神的という区別を、同一の純粋経験が異なる関係に入ることとして説明しようとした。ところが、ミラーとボードによる上記の批判は、同一の純粋経験が数的同一性を保ったまま複数の脈絡で異なる機能を果たすことを不可能にし、ジェイムズの純粋経験論を根底から覆す恐れがある。そこで本発表では、ミラーとボードの一次資料に当たり、彼らの批判の内実を示す。その際、この反論の背景にあるF・H・ブラッドリー(1846-1924)の関係概念批判を瞥見する。また、19世紀後半のアメリカにおける観念論の隆盛という当時の哲学的状況についても言及する。

「ミラー-ボードの反論」は、こうした批判に対する応答のために書かれた。この草稿の執筆時期は、『根本的経験論』に収められた諸論文と『多元的宇宙』とのあいだの時期(1905年の秋から1908年2月)に当たる。この時期に、ジェイムズの考えに重大な転換があり、この草稿にはその軌跡が克明に記されている。

この草稿のなかで、ジェイムズは、同一の項が複数の関係をもつことは不可能だとする上記の批判の妥当性を認めつつ、最終的に、批判が前提にしている「論理」そのものを否定し、実在はこの「論理」を超えたものであり、「論理」は実在を描写する手段として不適格であると主張する。

このとき否定された「論理」とは、論理一般ではなく、「心理学の公理」、あるいは「観念論の論理」と呼ばれるものである。この公理によれば、経験の存在と本質は、誰かによって経験されることと、どのように経験されるかに依存する。だから、ある項がひとつの関係に入るときと別の関係に入るときとで、その項そのものの経験のされ方が変わるので、その項の本質も変わってしまい、項の同一性が保てなくなるのである。

これに対してジェイムズは、この公理自体を捨てることによって、関係項の存在と本質を経験されることから切り離す。上記の公理に基づけば別々の存在者になってしまうものも、現実には

同一のままでありうる。「論理」の放棄によって、諸経験が相互浸透しつつそれぞれの同一性も保つ多元的世界が可能になる。

以上のような「ミラー-ボードの反論」における思索の延長線上に、『多元的宇宙』で示されたジェイムズの世界観がある。ジェイムズは、この著作において、『心理学原理』から「ミラー-ボード」に至るみずからの思索を回顧的に総括したうえで、みずからの相互浸透的実在観を打ち出している。

ジェイムズ哲学のこうした展開が意味することは、「観念論の論理」を捨てることによって、同一の純粋経験が複数の関係に入ることが可能になり、ジェイムズの多元的宇宙論も成立しうることになったということである。すなわち、複数の経験主体からなる「多宇宙(multiverse)」が依然として同じ「ひとつの宇宙(universe)」として連結することが可能となるためには、この「論理」が捨てられなければならない。ブラッドリーのようにひとつの全体の内に位置づけられて初めて部分が成立するのではなく、個々の経験項がそれ自身の同一性を保ちつつ、同じ世界のなかで関係しあう。これは『根本的経験論』の第二章「純粋経験の世界」(1904)において説かれた「モザイク哲学」にほかならない。

このように、『根本的経験論』と『多元的宇宙』は同じ世界像を提示しており、その世界像を可能にしているものが、「ミラー-ボード」における「観念論の論理」の否定である。それゆえ、この草稿にこそ、ジェイムズ宇宙論の重要な契機が見出されるのである。